

Present Perfect 再考

—Tense と Phase の関係より—

大 槻 茂 行

(1)

いわゆる伝統的な Prescriptive Grammar (あるいは School Grammar) という立場からみる時、一般に present perfect と呼ばれる predicate verb structure とその structural meaning は極めて明確に規定され、一見疑問の余地はないように思える。すなわち、その形態は have (has)+past participle であり、その意味するところは、過去のある時に起った動作が現在「完了」したこと、またその現在の「結果」を陳述するとか、過去のある動作、状態が現在まで「継続」しているとか、現在までにある動作、状態を「経験」したことを示す、などと。例えば H. Sweet は次のように述べている。

The perfect therefore expresses an occurrence which began in the past and is connected with the present, either by actual continuance up to the present time, . . . , or in its results, . . . , its result—namely 'being here'—is felt to belong to the present.¹⁾

しかしよく考えてみると、これは過去の一定時より現在までの時間領域を表現するのか、すなわち time との関係において捉えるのが本質的な意味に

1) H. Sweet, *A New English Grammar* (London: Oxford University Press, 1891), p. 98.

迫るものか、だとすれば present tense または past tense との関係はどうかという問題、あるいは、その時間領域での動作の様態として捉えるべきなのかというような問題を含んでいるように思える。端的に言えば、Sweet¹⁾ や Jespersen²⁾ のような time distinction の linguistic expression としての tense という category で論ぜられる問題なのか、あるいはむしろ aspect の問題なのか、また Trager, Smith などの言う phase³⁾ としてみるかという文法範疇の問題にまで拡大される問題である。この categorization の問題は、形態と意味との密接な関係の上で論じられるべきものであるので、本稿では、この形態と意味との両面から特に present perfect がどのような category に属するのが妥当であると考えられるか、また、その本質的な意味は何であるかを再考してみようと思う。勿論このような問題は他の形態、意味との対比によって初めて正しく位置づけられるものであるが、ここでは必要最低限の範囲に限定して考えてみたいと思う。

(2)

従来伝統的に完了形は tense の category で論じられている。例えば Sweet は present, preterite, future の simple tenses と、perfect (= preterite+present), pluperfect(=pre-preterite+preterite), future perfect (=pre-future+future) の compound tenses に分け、‘These compound tenses combine present, past and future respectively with a time anterior to each of these periods.’⁴⁾と述べている。彼は tense を inflection によって分ければ二つの tenses であると認めながらも、一つの直線上に示

1) cf. Sweet, p. 97.

2) cf. O. Jespersen, *A Modern English Grammar* IV (Copenhagen: Einar Munksgaard, 1949), p. 1.

3) G.L. Trager, H.L. Smith, *An Outline of English Structure* (Washington: American Council of Learned Societies, 1957), p. 78.

4) Sweet, p. 98.

される論理的な *notional time* を設定し、その「時」または「時間域」を表現する動詞の形態を *tense* とみなすことに由来している。つまり *tense* という *category* を意味領域にかなり重点をおいて定義していることによる。‘*Tense is primarily the grammatical expression of distinctions of time.*’¹⁾ なのである。従って完了形も当然それなりの *time distinction* を表現するものという概念によるように思える。Jespersen もこの点に関しては極めて類似した *tense* の *definition* を与えていることは前述した通りである。例えば *will, shall* 等は本来 *volition* を表わすものであるとしながら、それを *future tense* としないまでも *future time* を表わすとしているようである。また *tense-phrase* としてやはり *perfect* と *pluperfect* のように完了形を *tense* の *category* に加えている。従って現在完了を *retrospective present* とし、‘*it connects a past occurrence with the present state as having results or consequences bearing on the present moment.*’²⁾ と述べているように、やはり *time* をその意味の根底においているという印象を免れ得ない。Curme にしても ‘*There are four absolute tenses (present, past, present perfect, and future), which express time from the stand point of the moment in which the speaker is speaking without reference to some other act, and two relative tenses...*’³⁾ と述べ、現在完了は *time* を表現するものとしている。共通するところは、*tense* という *category* を *time distinction* を表わす形態とし、意味から *category* を設定している点にあると言える。従って一つの現在完了も、そのような *frame* から本質的意味が規定されて行くように思える。

一方、完了形は *tense* とは別の *category* として一つの *category* を設定する方法もある。これは *tense* を【*time* との関係とは全く別個に、つま

1) Sweet, p. 97.

2) Jespersen, p. 60.

3) G. Curme, *Syntax* (Maruzen Asian Ed., Tokyo: Maruzen Co. Ltd., 1967), p. 354.

り意味を第二義的なものとして純粋に形態から規定し、その後に意味的解釈を試みるものである。scientific な descriptive grammar を標榜する主としてアメリカ構造言語学が意味よりも形態からとするのがそれである。

‘To put it briefly, in human speech, different sounds have different meanings.’¹⁾ と Bloomfield が言う時、different sounds は different forms を意味し、scientific precision を狙うなら、明らかに物理的に捉え得る形態を当面の対象とすることは当然と考えられる。例えば Joos が tense を論じるに当たって、‘Form always dominates in these discussions, and meanings are subordinated to form in the sequence of topics, though with an occasional reversal for convenience.’²⁾ と言う時、両者の基本的な方法の相違を明らかに見るのである。従って tense という category では意味基準を一切排し、finite verb の inflection のみによって規定する。Joos は次のように定義する。

Now tense is our category in which a finite verb (non-finites can have voice and aspect and phase, but not tense) is either marked with -D or lacks that marker. Then by definition there can be only two tenses.³⁾

更に Francis は次のように述べている。

All English verbs except a few auxiliaries (*ought, must*) have two tenses, the **common tense** (usually called the **Present**) and the **past (or preterit) tense**. These are formally distinguished by inflections. The past-tense form consists of the base+the inflectional suffix {—ed₁}; the common-tense forms are the base alone and the third—

1) Leonald Bloomfield, *Language* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1933), p. 27.

2) Martin Joos, *The English Verb* (Milwaukee, The University of Wisconsin Press, 1964), p. 120.

3) Joos, p. 120.

singular (base+{-s}).¹⁾

Jespersen が未来域を考えながらも一般の tense system の future tense として扱われる shall, will を tense として認めることを避け、別個に扱ったのは秀れた洞察であったが、このように tense を考えれば簡単に割り切れてしまう。つまり shall/should, will/would という form の dichotomy として認め、その表わす意味は次の問題として処置すればよいのである。

(例えば Modal Auxiliaries としての意味を考えるなど。)

さてこのように inflection という純粹に morphemic distinction によって認められる二つの tenses も記述の方法として理解出来るが、その意味を考えねば言語の形骸化に過ぎず、特に言語学習の立場からはその科学的方法も意味を失ってしまう。‘To study this co-ordination of certain sounds with certain meanings is to study language.’²⁾ なのである。そこでその意味を考える時、全く time とは別個のものかと言えば決してそうでなくかなり密接な関係にあることは否定出来ない。問題から逸れぬために簡単に言えば、Modal Auxiliaries や Mood の問題を除けば past tense は発話の瞬間に何等の関係をもたない過去の動作、状態を示すのであり、present tense はそれ以外の事実、動作、状態を表わすと言うことが出来る。

Strang は ‘Though often called present, this can best be characterised negatively—it is the form used when there is no positive reason for the use of the past, or the subjunctive, or any complex conjugational form.’³⁾ と述べている。確かに present tense は non-past tense, neutral tense, あるいは common tense などと呼ばれ、past tense が past time event に refer する程に present time event に refer しないことも事実で

1) W. Nelson Francis, *The structure of American English* (New York: The Ronald Press Company, 1958), p. 332.

2) Bloomfield, p. 27.

3) Barbara M.H. Strang, *Modern English Structure*, 2nd ed. (London: Edward Arnold, 1968), p. 144.

あるが, past tense が past time sphere (又は point) を表わす以上, そういう意味で意味の上から二つの tenses を区別するものはやはり本質的に time の区別と考えてよいのではなからうか。Joos は time の概念を一切はずし, 用語も marked tense を remote tense, unmarked tense を actual tense としている。彼によれば 'The modern English remote tense has the categorical meaning that *the referent* (what is specified by the subject-verb partnership) is absent from that part of the real world where the verb is being spoken.'¹⁾ である。いわゆる Mood, Auxiliaries などを unreality とし, それに対する real world を設定し, そこで特に actual という名実を伴う概念を導入した秀れた試みであろう。事実 present tense は time を殆ど意識することなく用いられるし, 特に 'Nothin' pleases me more than a joke that's funny.' (T. Williams, *Cat on a Hot Tin Roof*), 'It takes money to take care of a drinker.' (Ibid.), 'Silence about a thing just magnifies it.' (Ibid.) 等は timeless statement などと言われるように時間域に関係ない。しかし完了形, 進行形等を構成する first constituent の inflection も同様に考えるのか, またこういう意味と完了形自身の全体としてもつ意味との関連でどう捉えればよいであろうか。

今迄完了形の問題に入る前にどうしても通らねばならぬ問題として, tense という category の形態と意味に対する二つの approach を概略して来た。完了形を論じるに当たっていずれの立場を取るべきかは, この完了形の first constituent への配慮と全体としての意味の上から決定されるべきであろう。

(3)

ここで Tense という category に対する二つの approach と categorical meaning を考慮しながら, perfect は tense category と考えるべきか, 別

1) Joos, p. 121.

個の category と考えるべきかを考察せねばならない。結論的に言えば、やはり Tense は inflection による二つの tenses に限定し、past time に対する non-past time という categorical meaning を考えてはどうであろうか。更に perfect に関しては Tense category として考えるよりは別の「相」としての category を認め、一般に Aspect と考えられるものと区別するために Trager, Smith の言う Phase と言う category を設定する。つまり「相」という category を認め、Phase と Aspect をその sub-category とするのが妥当ではないかと思うのである。

例えば次のような文を考えてみる。

They're playing croquet. The moon has appeared¹⁾ and it's white, just beginning to turn a little bit yellow (T. W., *Cat.*)

a.

b.

1. (The moon) appears. has appeared.

2. (The moon) appeared. had appeared.

上の例文の下線部に対して選ばれ得る predicate は 1. b しか考えられない。Inflection による区別を tense と考えれば、1. a と 1. b の first constituent は同じ tense である。従って tense という意味ではその意味も同じである。second constituent の inflection は non-finite verb であるから tense として問題にならない。しかし実際に上文で 1. a でなくて 1. b が選ばれると言うことは have+VD₂ と言う verb construction の形態上の相異、つまり tense という category 以外の要素及びそれのもつ意味が加わるからである。従って当然形態のみからみても tense とは別の category の設定が必要である。先に tense は意味上本質的にやはり time の区別を表わすのではなかるうかと述べたが、'has appeared' の first constituent が non-past tense であることは non-past time sphere をやはり表わすことになる。しかし、その verb construction が異なるのであ

1) 下線は筆者による。

るからそれに伴う別の **categorical meaning** を当然もつと考えられるし、それが **perfect** の本質的な意味に迫るものである。そこで **present perfect** に限定してみる。

一般に明確な **time** は副詞によって表わされるので **predicate verb form** も **time** に関係をもつとすれば副詞からその性格がある程度規定出来る¹⁾。今かりに *Cat on a Hot Tin Roof* (T. Williams) 及び *Breakfast at Tiffany's* (T. Capote) に見られる81個の **present perfect** の用例(単文及び複文における主節のみ)の内、**time** を実際に表わすもの、及びそれを **imply** する頻度を示すものの数を見ると、これらの副詞を伴うもの36例(45.6%)²⁾、伴わないもの45例(54.3%)であって必ずしも副詞からその性格を規定するには充分と言えないかも知れない。これらの副詞は明らかにある特定の期間を示すもの13例(36.1%, *for fifteen years, over two years, for the past five years* など)、ある期間を **suggest** するもの18例(50%, *by now, since, lately*、及び **frequency** を示す *always, so many times, never* など)、その他 *now, when* などを伴うもの5例(13.9%)である。従って明らかに過去を示す副詞を伴わないということが言えるが、これは完了形の **first constituent** が **non-past tense**、つまり **non-past time sphere** を示すという事実には他ならない。それ以上の完了形としての特性を示すのは、これが「ある期間」(**a certain period**)を **imply** するということであるが、**present perfect** の45.6%から言えることであってそれで全体を **cover** するに充分とは言えない。従って更に **situation** の中での **semantic** な **approach** も必要である。

- 1) 太田氏は *Tense and Aspect of Present-Day American English* (Tokyo. Kenkyusha, 1963) にて副詞の種類と動詞との **co-occurrence** から計量的な数値をもって各 **verb construction** の本質的な意味に迫ろうとする科学的な **unique** な **approach** を示されている。
- 2) 太田氏の統計では823の **present perfect** の内、**time** 及び **frequency indicators** と共に起るものは253 (30.7%) である。(Ibid., p. 43)

A.A. Hill は Sweet の ‘continuance’ (continuing results を含めて)の概念を ‘I have read that book twenty times but I am not reading it now’ 等の例をあげて ‘the accepted analysis’ であるが ‘not strictly accurate’ だと批判している¹⁾。その代りに彼は二つの semantic component つまり non-past action と completeness を認めて ‘The completeness, however, is to be associated only with the past participle, and non-past component only with the non-past first verb, *have*.’²⁾ と述べている。しかし ‘I have come to see you three times this week.’ の例での non-past action とはどうであろうか。Fries は ‘have’ が past participle と一緒になって ‘function word for the expression of completed action’ になっているとする³⁾。Hill は更に ‘I have been hungry all day.’ での completeness ということを説明して, ‘completeness, however, is still there, though it is now translated from the action to the period of time’ とし, ‘... it is this period which is complete’ としている⁴⁾。太田氏は ‘Perfect forms indicate the occurrence of an action or the existence of a state within or for a period of time stretching back into some earlier time. In the case of present perfect, one end of the period is the moment of speaking.’⁵⁾ とされている。確かに Jespersen が retrospective present とも云っているように, moment of speaking を基準にして a period of time を表わすとも言えるし, completeness ということも理解出来るが, simple past また non-past tense もある意味で completeness の component を含むので今一つ他により積極的な意義を求

1) A. A. Hill, *Introduction to Linguistic Structure* (New York: Harcourt, Brace & world Inc., 1958), p. 212.

2) Hill, p. 212.

3) C.C. Fries, *American English Grammar* (Tokyo. Maruzen Asian Edition, 1966), p. 194.

4) Hill, p. 213.

5) Ota, p. 118.

めることは出来ないであろうか。

前述したように Hill が 'it (=completeness)¹⁾ is now translated from the action to the period of time' と述べているが、この点こそ注目すべきであるように思う。ただこの場合 'period of time' よりむしろ 'the state' とすべきではなかろうか。つまり、ある action があり、それが必然的に伴なう状態へと意識が 'translate' (移行)される所にその本質的意味を求めることが出来、そういう状態へと意識を移行させるその「行為」を perfect form で示すのではなかろうか。細江逸記氏が「present perfectなるものは『確認確述』の語形であると言はんと欲する」²⁾ とされたのはある状態へ導くその行為を確認するという意味であり鋭い洞察であると思われる。具体例を見てみる。

The moon *has appeared* and it's white, just beginning to turn a little bit yellow. (*Cat.*, p. 24)

I've *discovered* with deaf people the thing to do is not shout at them but just enunciate clearly. (*Cat.*, p. 36)

It's peculiar. A very peculiar thing *has happened*. (*Breakfast.*, p. 10)

Anyway, she 's *gone*. (*Breakfast.*, p. 14)

That's funny. He's *written* an awful lot of radio stuff. (*Breakfast.*, p. 21)

これらの例文で appear, discover, happen, go, write はそれぞれある action (event) である。しかし各 perfect form が意味するものは、その action に伴なう effect を意味している。つまり、「月が出る」という action は必然的に「明るくなった」という状態を伴っている。deaf people について「発見した」ことが必然的にだから「知っている」という状態を、「書いた」だから「もっている」という状態を伴なう。だから perfect form はこういう行為に伴なう state(effect)を意味するものであり、そういう effect を引き起す act (event) を perfect form で表現していると考えることが

1) () は筆者による、

2) 細江逸記、「動詞時制の研究」8版(東京・泰文堂, 昭和30年), p. 78.

出来る。このように perfect は act (event) と state (effect) との二つの面からなっている所にその特質を見ることが出来るのではなからうか。

Joos の説明によれば, 'He came' という行為の simultaneous effect は 'He is seen' であり, immediate (又は delayed) effect は 'He is here' である。完了形の意味するところは, つまり話者の意識はこの immediate effect におかれるが, その effect をもたらす行為はその effect の為にあるとし, '... the perfect phase'¹⁾ means that the event is *not mentioned for its [own sake but for the sake of its consequences. The perfect phase has removed our attention from the event which it itself presents, and has relocated our attention on the subsequent opportunities for events ...]*²⁾ と述べている。The moon appears. であっても The moon appeared. であってもその event は complete でもあり, 確認でもあるが, その effect に言及するものではない。The moon has appeared. であってもはじめて event と effect が表現される。

一般に perfect の意味を「完了」, 「結果」, 「継続」, 「経験」と細分して述べられるが, これらは context 中の前後関係から知られるものであり, また「完了」という時は act, event それ自身に関するものであり, 「結果」, 「継続」, 「経験」は event に伴う effect について述べられるものであり, 「結果」はそれ自体時間的継続性を imply し, 「経験」は過去の行為を imply する。従ってこのように分けることは様々な問題を含むので妥当な説明とは云えないであろう。例えば次の例も situation の助けがなければ結果, 完了, 継続, 経験のいずれか断定出来ない。

We've separated by mutual agreement. (Breakfast., p.34)

I've thought maybe after the war, Fred and——.(Breakfast., p. 36)

1) 'Phase' は Trager, Smith によって用いられているが, 'the cause and the principal effects are in phase with each other' という electrical circuit theory から借用した terminology として Joos は説明している。(Joos, p. 139)

2) Joos, p. 140.

しかし *separate* とか *think* という *act* の *effect* として例えば「一緒に居ない」ということは意味されている。またたとえ *action verb* でなくても例えば '*I've been so God damn disgustingly poor all my life!*' (*Cat.*, p.41) であっても, '*became poor*' という *event* に伴ない '*be poor*' という *effect* を意味している。また Hill の '*I have read that book twenty times but I am not reading it now*' の例も, '*read*' という *act* に伴ない, だから '*I know*' という *effect* を意味しており '*I am not reading it now*' と抵触することはない。'*I met him before*' も '*met*' という *act* に必然的に伴う '*I know him*' という *effect* が考えられるが, その *effect* を表現するためには Joos の云うように '*the perfect phase means that the event is not mentioned for its own sake but for the sake of its consequences*' だから '*I have met him before*' と表現されるべきである。

以上のように考えれば少くとも本質的に *time* の概念を伴なわないのであるから, たとえ過去を表わす副詞と共に用いられることがあっても, その *effect* の故に述べられるのであれば矛盾しないし, また *subordinate clause* にあっても同様と考えられる。唯, 前述したように *present perfect* の場合, その *first constituent* が *non-past tense* であるという意味で *past tense* と区別されねばならないし, 従って *non-past time sphere* (必らずしも現在のみに限らない) における *effect* に言及するものでなければならない。次のような場合でもその意味で *perfect form* が認容できる。

I need not swear to that oath, for I *have sworn* it long ago.

(Kingsley, *Westward Ho!*, XXVI.)¹⁾

... now that you've *lost* the game, ..., you have that rare sort of charm ... (*Cat.*, p. 24)

I am always drawn back to places where I *have lived*, the houses and their neighborhoods. (*Breakfast.*, p. 9)

1) 細江逸記, p. 70.

When you *have signed* the cheque, I will hand you the letter.¹⁾

(4)

今迄述べて来たことを要約してみると次のように言える。完了形は本質的に event とそれに伴なう effect, 別の言い方をすればある行為からそれに附随して生じる状態へと話者が意識を移行するという二つの面から把握されるべき性質のものであり, これらは相互にある phase を成していると考えられる。しかしその行為または出来事そのものは perfect form として表現されるが, その意味する所はそれの伴なう effect を表現すると解すべきである。従って「時間」としてよりも, むしろ「相」として把えるべきと考える方が妥当ではなからうか。Sweet や Jespersen は時の概念にとらわれすぎている点で, また Hill や Fries の 'completeness' という semantic component, また太田氏の言われる 'period' という essential semantic component も, 前者は 'I finished it' なども completeness である点で, 後者は科学的であるが verbal context のみに限定されているのでやや消極的な規定の仕方により, これらよりむしろ Joos の言う phase として event (cause) と effect の関係で捉え, その effect の故に event を perfect form で表現すると見做すのが一番よくこの特性を明らかにするように思えるのである。更にこの construction の first constituent が past tense 及び non-past tense を示すという tense indicator としての function を見逃すことは出来ない。tense を inflection のみに限定して考えるか, notional time を基準にして考えるかは個々の立場の問題であるが, 一応形態を優先する立場をとりたいと思う。その場合, 単なる inflection の区別と考えず, やはりその意味として基本的には time distinction を考えざるを得ない。とすれば marked は past time sphere を unmarked は non-past time sphere に

1) Jespersen, *Essentials of English Grammar* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1933), p. 246.

refer すると考えられるので、その点 present perfect と past perfect を意味上からも区別するので、perfect form が time とは全く無関係であるとは言うことが出来ず、supplementary semantic component としてそれを考えねばならない。しかしいずれにしても perfect (phase と呼ぶにしても) としての形態的特長を備え、その意味的特長も明らかである以上、tense という category とは別個の「相」として例えば Phase と呼ぶような category の中で論じられるべき問題であると思うのである。